

I

日本史

問題は、次のページから始まり、I、II、III、IVの4題ある。

解答は、問題ごとに与えられた指示にしたがって、それぞれ答案紙の所定の欄に書きなさい。

日本史 問題 I

古代～近世における建造物に関する次の A・B の文章を読んで、以下の問いに答えよ。

A 竪穴建物(竪穴住居)は、床面が地表より下に位置する建物であり、おもに居住用の建物として、縄文時代から古代まで普遍的に存在した。時代によりその形状や特徴にさまざまな変化がみられるが、大きな変化の一つは、古墳時代中期頃における煮炊き用施設の変化である。

弥生時代には、竪穴建物に加え、柱を地中に埋めて固定する 建物が、おもに高床の などの用途として多くみられるようになるが、古代以降は徐々に住居の建物構造として一般化していく。

飛鳥時代には、仏教とともに寺院の造営技術が伝来する。この技術は、それまでの日本列島における建物構造とは一線を画する特殊な工法であり、その後、宮殿や官衙の造営などにも使われていくようになる。

問 1 下線部①について、図 1 と図 2 を比較し、それぞれの煮炊き用施設の具体名を挙げつつ、その変化の背景および、施設の変化にともない定着した調理法について述べよ。

問 2 下線部②について、 と に入る言葉を述べよ。

問 3 下線部③について、図 3 を参照してその工法について説明せよ。

この部分につきましては、
著作権の関係により公開いたしません。

B 現代では、建造物は不動産と考えられているが、日本の伝統的木造建築は移築可能な動産であった。八世紀には、遷都にともなって宮殿の建造物が解体・移築される^④のは普通のことであった。また、寺院建築についても、例えば法隆寺東院伝法堂は聖武天皇の夫人であった橘古那可智の邸宅の建物を移築したものであり、鑑真^⑤がひらいた唐招提寺の講堂は平城宮東朝集殿を移築したものであることが知られている。

建造物の移築は中世以降も行われるが、近世初期において、戦国時代前後に荒廃した寺院を復興する際に顕著にみられる。例えば、最澄^⑥がひらいた延暦寺では、織田信長による焼き討ちの後、豊臣秀吉によって^⑥■城寺の仏堂が施入されて■塔釈迦堂となり、光孝天皇が発願し^⑦宇多天皇が完成させた仁和寺では、江戸時代の初めに内裏の紫宸殿が移築されて金堂とされた。また、醍醐天皇が発願しその子供たちが完成させた醍醐寺では、現在の金堂は豊臣秀吉により紀伊国湯浅の満願寺から移築されたものである。こうしたことは、単に経済的観点から古い建物をリユースするというだけではなく、政治的な意味もあったと考えられる。

問 4 次の史料1～3は、下線部④に関連したものである(いずれも原漢文。一部省略したり、書き改めたりしたところもある)。これらを参考にして、史料3に出てくる建造物の使われ方について説明せよ。

この部分につきましては、
著作権の関係により公開いたしません。

注1 朝賀のこと。臣下が天皇に拝礼すること。

注2 布で作った幕。

注3 寄棟造の建物。寄棟造の屋根は、正面から見ると台形状になる。

問5 下線部⑤⑥に関して、鑑真は唐から渡ってきたが、その目的は何であったか述べよ。関連して、最澄はある施設を延暦寺に造ろうとしたが(その設置が認められたのは最澄の死後)それは何であったか述べよ。

問6 下線部⑦⑧に関連して、宇多天皇から醍醐天皇に代替わりしたあと、政変が起こっている。その政変で失脚した人物の名を挙げ、その人物の事績について知るところを述べよ。また、その人物は、後世どのように扱われることになったか、説明せよ。

日本史 問題Ⅱ

中世の農業に関する次の文章を読み、以下の問いに答えよ。(史料は、一部省略したり、書き改めたりしたところもある。)

現代は、地球温暖化にともなう自然環境の激変が懸念されているが、中世は正反対に、おおむね寒冷期に属し、農作物を育てるのに苦勞の多い時代であった。そのような時代においても、人々は、量的、質的に農業生産力を高め、なんとか生き延びようと懸命な努力を重ねていた。

質的な努力でわかりやすいのは、一定の土地の範囲内で収穫量を確保しようという集約農業の発展である。

① 量的な努力でわかりやすいのは、農地開発の進展である。のちにかかげた二つの図^②ABをみると、同一地域の中世と近世との景観を比較できる。図Aは1316(正和5)年の「日根野莊日根野村荒野絵図」、図Bは1761(宝暦11)年の「日根野村井川用水絵図」で、いずれも原図の概要を示すトレース図である。日根野村の所在地は和泉国、現在の大阪府南部であるから、基本的には、東方が山地で上流、西方が海で下流である。

トレース図A Bの共通点は、第一に、北から北東にかけて山地が描かれ、右下に東北から西南に向かって流れる檜井川が描かれる。第二に、トレース図は道筋を二重線で示すが、図Aの西端の ア 大道は、図Bにはみえない。第三に、東南方向の同じ地点に、大井関(大)明神がまつられている。井関とは、一般には用水の取水口を意味する。第四に、「巾」等は家屋を示し、その集合体は集落である。図Aのみの表記としては、「井」「田」状の単線で田畠が散在している。図Bのみの表記としては、ため池ともつながる毛細血管状の用水が表示されているが、用水にそって、田畠が全面的に展開していたものと考えられる。

問 1 傍線部①に関連して、次に掲げる鎌倉幕府の命令を示す史料を読み、以下の設問(1)(2)に答えよ。

この部分につきましては、
著作権の関係により公開いたしません。

(出典：『中世法制史料集』一、221頁)

注 1：依怙・利益，私利。

注 2：備後，備前・現在の広島県東部と岡山県東南部とに所在した国。

注 3：因幡前司・前因幡国司という意味だが，名目的な称号であり，この史料でも，長井は前因幡国司としての役割を期待されていたわけではない。

- (1) この命令を出している北条長時は鎌倉幕府の執権，政村は執権を補佐する連署である。本文末尾の「仰せ」とは，どのような人物によるものか，その地位を述べよ。また，宛名の長井泰重とはどのような立場にある人物と考えられるか，史料を読んで述べよ。
- (2) この史料に記されているのは，どのような農法のことか。また幕府は，この史料でどのようなことを命じているのか，それぞれ述べよ。

問 2 傍線部②に関連して、次ページに掲げた図A、図Bと、この二つの図に関するリード文の説明をよくよんで、以下の設問(1)(2)に答えよ。

- (1) 図Aの左端(西端)の「大道」は、この絵図の当時から存在した高野とならぶ南方の著名な信仰地 へと続いている。立地から考えられる空欄 の地名を答えたうえで、この信仰地について知るところを述べよ。
- (2) 図の表題からもわかるように、近世の図Bの主題は、毛細血管のようにはりめぐらされた用水で、絵図を作成した人々の関心事は農業に必要な取水だと考えられる。一方、中世の図Aの場合、①主題は何であり、どのように描かれているか、②なぜ中世は近世とは異なる景観がみられるのか、その政治的、社会的背景、③図Bは何のために描かれたと考えられるか。以上の三点について述べよ。

この部分につきましては、
著作権の関係により公開いたしません。

(図A Bとも，水本邦彦『徳川の国家デザイン』小学館，2008年，131頁より)

日本史 問題Ⅲ

江戸時代の藩財政と百姓一揆にかかわる次の文章を読み、以下の問いに答えよ。なお、引用史料は原文通りではなく読みやすく書き直した。

この部分につきましては、
著作権の関係により公開いたしません。

(刈谷市教育委員会編『刈谷町庄屋留帳』第2巻，刈谷市，1976年，120頁)

ところで、10月4日には藩領41ヶ村すべてから600～700人に及ぶ百姓たちが刈谷城近くに集まった。刈谷藩はただちに役人を現場に派遣して、百姓たちの願書を受け取り、解散させた。刈谷藩は翌朝早々に新役人に謹慎を命じ、引き続き解雇して藩外へ追放した。その処分理由を藩主は「外聞の悪いことを起こしたから」と述べる。その一方で刈谷藩は百姓たちの誰ひとりも処分せず、41ヶ村に科料米(いわば罰金)として1500俵の米を納めるよう課しただけであった。^①この事件は、いわば百姓側の勝利に終わったのである。^②これがこれまで刈谷藩元文三年百姓一揆と呼ばれてきた事件^③である。

問 1 文中の空欄には年貢徴収法の名称があてはまる。空欄 にあてはまる用語を答えるとともに、ふたつの年貢徴収法の違いを述べよ。

問 2 下線部①の 1500 俵の科料米(罰金)は、藩領 41 ヶ村にとって通常納める年貢量の約何%に相当するか、四捨五入して整数で示せ。刈谷藩の石高は 23000 石である。年貢率を 5 公 5 民とし、本年貢のほかの要素は捨象する。また、俵ひとつに 0.4 石の米が入るものとする。

問 3 下線部②は、刈谷藩主の立場からすれば増収が実現できなかったことを意味し、厳しい儉約は引き続き行われた。あなたが刈谷藩主なら、どうやって財政再建を図るか。江戸時代の幕府や諸藩の採用した諸政策を参考にしながら述べよ。

問 4 下線部③「百姓一揆」という言葉づかいは、17 世紀半ば以後の史料にはほぼ出てこない。本文の事件も史料では「騒動」である。百姓たちは武装蜂起をせず、大名も武力鎮圧をしなかった。藩主は「騒動」を外聞の悪いものとして願書の提出と受理、担当役人の処分を速やかに行って「騒動」を収めた。ここには大名と百姓の関係はこうあるべきだとする考え方が示されており、その考え方は 17 世紀半ばの危機的状況を克服するなかで定着した。この考え方とはどのようなものか、17 世紀半ばの危機的状況を具体的に示しながら説明せよ。

日本史 問題Ⅳ

近代から現代における生活・文化に関する次のA・Bの文章を読んで、以下の問いに答えよ。(史料は、一部省略したり、書き改めたりしたところもある。)

この部分につきましては、
著作権の関係により公開いたしません。

問 1 下線部①について、これらの都市が文明開化の窓口となった理由について説明せよ。

問 2 下線部②に関連して、次のような史料がある。青森県が、東北の夏祭りで有名なねぶた(ねぶた)や、各地の農村で盛んに行われていた虫追い(虫送り)を禁止した法令である。史料を読んで、青森県がねぶたや虫追いをどのようなものとみなしていたのか、そのことを示す二つの史料で共通する語句を答えよ。また、それを踏まえて、なぜ庶民の間に定着していた年中行事がこの時期に禁止されたのか、説明せよ。

この部分につきましては、
著作権の関係により公開いたしません。

問 3 下線部③に関連して、改暦後も農村部の多くの地域では、新暦とともに旧暦を用いる生活が長く営まれていた。農村部が旧暦を使用し続けた理由について、考えられるところを述べよ。

この部分につきましては、
著作権の関係により公開いたしません。

問 4 下線部④について、なぜGHQは検閲後、『長崎の鐘』の出版を許可しなかったのか。GHQによる占領政策をふまえて論ぜよ。

問 5 下線部⑤に関連して、下の図版は、ある内閣が実行した政策による影響を風刺したマンガである。その内閣の総理大臣とは誰で、その政策の内容について説明せよ。

この部分につきましては、
著作権の関係により公開いたしません。

(『毎日新聞』)

(『ビッグコミックスピリッツ』)

(『読売新聞』)

問 6 下線部⑥に関連して，下の史料は 1940 年に名古屋市で開催された第 2 回日本厚生大会の開会趣旨の一部である。文化やスポーツは戦時体制にいかなる形で適応させられていったのか。史料に即して説明せよ。

この部分につきましては、
著作権の関係により公開いたしません。

(『第二回日本厚生大会会誌』)